

義兄のいい子にされました

（大学でも続く調教）

体
験
版

第
1
話

同居初日に押し倒されました

実家の玄関は、母がいなくなった瞬間、他人の家になった。

ことねは花束を抱えて立ち止まる。母のブーケだ。式場から空港へ向かう車に、母は持って降り忘れた。

代わりに持ち帰ったのが、ことねだった。

ブーケを靴箱の上に置く。白い包み紙が、玄関灯に照らされて、妙に明るい。

「重かったろ？」

背後から声がした。

ことねは肩で頷く。玲司の声を肩で受け止めるのが、いつの間にか癖になっていた。

「平気です」

「コート、貸してみ」

伸びた手が肩にかかる。

脱がせる動作には、迷いがなかった。ことねは脱がされるままになる。式の間ずっと張り詰めていた肩が、コートを失うとふっと軽くなった。

「ありがとうございます」

「敬語、要らないんだけど」

「……要ります」

玲司は低く笑った。否定の含まれない笑い方。

受け取ったコートを玄関先のハンガーに掛ける。リビングへ続く廊下の灯りは、母が出る前に全部つけたままだ。普段なら節電を口うるさく言う母の、最後の置き土産のつもりだろう。

ことねは靴箱からブーケを取り、リビングの花瓶に挿した。挿し終えてから、もう自分の家ではない気がして、手の置き場を失う。

キッチンへ回ると、玲司はもう冷蔵庫の前にいた。手にはビールの瓶が二本。

「お祝い、しよ」

「私、お酒は」

「一杯だけ。新しい家族の挨拶」

ことねは口を開きかけて、閉じた。

（一杯だけなら、断る方が不自然か……）

カウンターのスツールに腰掛ける。玲司は栓を抜き、ことねのグラスに注いだ。泡が乾いた音を立てて壁を作る。

「いただきます」

ことねは一口含む。

喉が冷たくなり、胃に落ちて、肩の力が抜けた。

玲司は注ぎ足す。

「もう一杯」

「いえ、本当に……」

「家族なんだから、いいだろ？」

ことねの手元のグラスは、もう半分なくなっていた。

二杯目に手をつけた頃には、最初の一杯がどこへ消えたのか分からなくなっていた。

ことねは酒に弱い。一杯で記憶が薄まる。二杯目で輪郭が溶ける。

カウンターに肘をついた腕の角度が、いつのまにか曖昧になっ
ていた。

玲司はグラスを置いた。

「ことね」

「……はい」

「お兄ちゃん、まだ挨拶してなかったよなあ？」

「……？ お兄ちゃんとしてのご挨拶、ですよね」

「そう思いたきゃ、思っとけば？」

ことねは顔を上げた。

玲司は薄く笑っていた。両手をカウンターに置いて、ことねの椅子の両側を塞いでいる。逃げ道は、いつの間にか塞がれていた。

（あれ……、いつから、こんな近くに……）

ことねは背筋を伸ばす。背筋を真っ直ぐにすれば、相手と対等になれる。ゼミで身につけた癖だ。

「冗談はやめてください」

玲司の目を見て、言った。

「あなたは……義理とはいえ、お兄さんでしょ」

玲司は、笑った。

目が笑っていない笑い方だった。

「義兄ね」

「はい」

「俺、お前のこと、ずっと前から知ってるんだけど」

「え？」

「忘れたなら、それでいいよ」

玲司の手がブーケに触れる。

その薬指に、銀の指輪が嵌まっていた。

ことねは初めて、それに気付いた。式の間も、披露宴の最中も、玲司の手は何度も視界に入っていたはずだ。なのに、ことねの目は、ずっとそれを通り抜けていた。

玲司の上着のポケットで、スマートフォンが震える。

玲司は片手で取り出して、画面を見る。

「ちょっと出る」

「どうぞ」

玲司はリビングの窓際へ歩いていく。

「ええ、予定通りです。半年は、心配ありません」

「はい、彼女もこちらに」

「では」

低い声だった。仕事の声でもない、家族の声でもない、契約相手と話すような声。

（仕事の電話、よね……）

ことねは耳を傾けかけて、やめた。聞いてはいけない気がした。

玲司はスマホを切って、戻ってきた。

ことねの椅子の正面に立つ。

「子猫ちゃん」

「……」

「酔ったろ？」

「……すこし」

「カウンター、冷たいから、危ないなあ」

玲司の手が、ことねの腰に伸びる。

ふわっと体が浮いた。

気付いたときには、ことねはキッチンの大理石のカウンターの上に、仰向けで寝かされていた。

カウンターは冷たかった。

ことねの背中とは、触れた瞬間、ぞくつと震える。スカートはまくれ上がり、太腿の付け根まで露出していた。

玲司は片手でことねの両手首を捕まえる。

自分のネクタイを解いた。

ことねの手首に絹の感触が巻きつき、頭の上で結ばれる。

玲司は結び目を確認した。

「子猫ちゃん、お兄ちゃんに、ご挨拶しとけよ♡」

「や、待って……、ま、待ってください。」

ことねは身をよじる。

玲司の唇が、首筋に降りてきた。

ちゅうう♡ちゅうう……っちゅうう♡ちゅうう♡ちゅうう♡ちゅうう♡

ちゅうう♡

うなじを連続で吸われる。

ことねの背筋が、勝手にしなった。

「やあ……っ♡そこ、しないで……♡」

「うなじ、弱いんだなあ？」

「ち、ちが……、やあ……っ♡」

玲司の唇は、うなじから耳へ移動する。

耳たぶを、唇で挟む。

ちゅう♡ちゅう♡ちゅう♡ぴちや♡ぴちや♡ぴちや♡

舌が、耳の中に入った。

「ああ……っ♡♡や、やめ、おみみ、おみみ、らめなのお

♡」

「お耳、お豆さんと繋がってるの、知ってる？」

「し、しらな……っ♡」

「いま、教えてあげるなあ♡」

ぴちゃ♡ぴちゃ♡ぴちゃ♡ぬる……っ♡ぴちゃっ♡

(耳……、なんで、耳で、こんな……っ♡)

玲司の指が、ブラウスのボタンを外す。一つ、二つ、三

つ。

ブラの上から、玲司の指が乳首を探り当てた。

すりすり♡すりすり♡こりこり♡

布越しに撫でられる。

ことねは唇をかむ。

（こんなの、お酒のせい、お酒のせい……、だよね……？♡）

玲司はブラの上端を引き下ろした。

乳首が、外気にさらされる。

ピンクの先っぽが、すでに固く尖っていた。

「ふーん、ここ、もう勃ってんなあ？」

「ち、ちが……」

「ことねちゃんの体、嘘つかないだろ？♡」

玲司の唇が、乳首に降りてくる。

ちゅう♡ちゅうう♡ちゅぱっ♡ちゅぱちゅぱちゅぱ♡
吸われる。

反対側の乳首は、指の腹で挟まれた。

くりくり♡こりこり♡つんつん♡くりくり♡

「ふああ♡あ、ああ……っ♡それ、らめ、らめ……っ♡」

「ダメ、じゃないだろ？子猫ちゃん」

ちゅぱちゅぱ♡ちゅうう♡ぺろ♡ぺろぺろ♡

(あ、あ……、おっぱい、なんで……、こんなに、しゅご

い……っ♡)

玲司の手が、スカートの中に入る。

パンティの上から、ふっくら盛り上がった部分を撫でる。

すりすり♡すりすり♡すりすり♡こりこり♡

「ことねちゃん、もうこんなに濡らしてんなあ?」

「ち、ちが……」

「お兄ちゃんに嘘、つくな？」

パンティの脇から、玲司の指が滑り込んだ。

くちゅっ♡

音が、した。

玲司の中指が、ことねの中に入っていく。

ぬぷ……っ♡ぬぷぬぷ♡ぬぷ♡

浅いところで止まる。

「ことね、ココ、初めて？」

「……………」

「素直に言え」

「は、はじめて……………っ♡」

「ふうん」

玲司の指は、奥には行かない。代わりに、入り口でゆっく
り回し始める。

ぐちゅっ♡ぐちゅっ♡ぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅ♡

「ふあ……………あ、ああ♡なに、これえ♡」

「気持ちいい？」

「ち、ちがう……っ♡」

「ふうん。じゃあ、もうやめよーかな？」

玲司は手を引きかける。

「やっ……」

ことねの口から、声が漏れた。

玲司は止まる。

「やめないで、って？」

(言っちゃった……、私、いま、なんて言った……？♡)

「い、いえ……、その……」

「言えないなら、お口で確かめてあげるなあ♡」

玲司の体が、下がった。

ことねの脚が、肩に乗せられる。

パンティが脇にずらされた。

れろお……っ♡

舌が、当たった。

「あああ♡♡♡そ、そこ、しょこ、らめ、らめえ……♡♡」

「お豆さん、こねこね♡しよーな♡」

れろ♡れろ♡れろれろ♡ちゅぱちゅぱちゅぱ♡

「ふああああ♡♡♡や、やあ、やめ……♡♡♡」

ちゅう♡♡♡じゅぱ♡♡♡じゅぱじゅぱ♡♡♡ぺろぺろぺ

ろ♡

吸われ、舐められ、転がされる。

（あたま……、しろい……、なに、これ、なに……♡♡♡）

玲司の舌が、クリトリスを押し潰す。

じゅぱっ♡じゅぱっ♡ちゅうう♡♡

「ひぎっ……♡あ、ああ♡♡いぐ、いぐ、いぐう

♡♡♡」

ことねの腰が、カウンターから跳ねた。

ぴゅっ♡ぴしゃっ♡

玲司の口元に、しずくが飛ぶ。

玲司は、口元を拭わない。

その代わり、笑った。

「お豆さんで、一回。次は、おまんこの番なあ♡」

ぐったりと脱力したことねの脚が、両端に押し当てられる。

パンティが、引き千切られる音がした。

玲司は自分のベルトを外す。

布が擦れる音と、バックルが落ちる音。

ぬぷっ♡

先っぽが、入った。

「あっ……、お、おっき……っ♡」

「ことねちゃんのお肉、すごい絞めてくるなあ♡」

ぬぷ♡ぬぷ♡ぬぷぬぷ♡ぼちゅっ♡

少しずつ、奥へ。

玲司は途中で止まる。

「ねえ、子猫ちゃん。一気に行くよ?」

「やっ、ま、まっ……」

ぼちゅぼちゅぼちゅぼちゅぼちゅぼちゅ♡

根元まで、一気に入った。

「あ……っ♡♡いっ、いた……っ♡」

「ハフハフ♡……、ことね、すっごい、いい♡」

玲司は、ぐっと止まる。ことねが慣れるのを待つ風でも、待たない風でもない。

止まった、というより、味わっていた。

♡
」

「うん、ことねちゃんの中、お兄ちゃんに馴染むの、早いね

「ち、ちが……、あ、ああ……っ♡」

（……、わたし、嫌、って言ったのに、おまんこ、もう、勝手に、しまっちゃってる……っ）

だちゅんっ♡だちゅんっ♡だちゅんっ♡

玲司は腰を打ち付け始める。

カウンターの上で、ことねの体が跳ねる。

だちゅんっ♡だちゅんっ♡だちゅんっ♡だちゅんっ♡ぐちゅぐちゅぐちゅ♡
ちゅ♡

「ふああ♡♡ま、まっへ……、あ、ああああ♡♡」

「へこへこ♡♡してあげるよ♡お嫁さん♡」

「ち、ちが……っ♡およめ、ちが……っ♡」

「違わないだろ？ココ、誰のもん？」

ぐりっ♡ぐりっ♡ぐりぐりぐり♡

玲司は、ことねの最奥に当てたまま腰を回した。

「ひぎっ……♡おっ♡……や……、や……、らああ♡♡」

(しゅご……、しゅごい……、おなか、おく、ぜんぶ、しゅ

ごい♡♡)

だちゅんっ♡だちゅんっ♡だちゅんっ♡ぐちゅぐちゅぐ

ちゅ♡ねちゅねちゅねちゅ♡

「言ってみ？子猫ちゃん。ココ、誰の？」

「れ、れ、れいじ、しゃ……っ♡♡」

「うん、よく言えたな♡」

玲司はことねの腰を持ち上げ、片脚を自分の肩に担ぐ。

体勢が変わると、当たる場所も変わる。

だちゅんっ♡だちゅんっ♡だちゅんっ♡ずぶずぶずぶ♡

ぐちゅぐちゅぐちゅ♡

「ああ♡そ、そこ、らめ、しょこ、もお……っ♡」

「奥、ぐりぐり♡が、欲しい？」

「ち、ちが、ちが……っ♡」

「ふうん。じゃあ、ぐりぐり♡なしで、へこへこ♡だけにしてあげる♡」

へこへこ♡へこへこ♡へこへこ♡ぐちゅぐちゅぐちゅ♡

「やああ♡♡ぐりぐり、して……っ♡♡おく、おくに、ほ

し……っ♡♡」

「ことねちゃん、すっごい素直になってきたじゃね？」

玲司の指が、ことねのクリトリスに戻ってくる。

くりくり♡こねこね♡くりくり♡

挿入と愛撫が同時。

「ひざいい♡♡ま、まって、まって、しょこ、いっしょ

は……っ♡」

「一緒に、ダメ？悪い子だね♡お嫁さん♡」

くりくり♡くりくり♡こりこり♡くりくり♡

だちゅんっ♡だちゅんっ♡だちゅんっ♡だちゅんっ♡

「ことねちゃん♡イケ♡お兄ちゃん、イケ♡」

「ふあああ♡♡いぐ……っいぐうう♡♡♡」

ことねの背中が、カウンターから浮き上がる。

ぴゅっ♡ぴしゃっ♡ぷしゃっ♡

カウンターに、しずくが飛ぶ。

でも、玲司は止まらない。

だちゅんっ♡だちゅんっ♡だちゅんっ♡だちゅんっ♡

「ことねちゃん、もう、お兄ちゃんの形、覚えたかな♡？」

「お、おぼえ……、おぼえ、ちゃ……っ♡♡」

「素直になってきたなあ♡えらいなあ♡」

玲司は片脚を肩から下ろす。代わりに、ことねの両膝の裏に手を入れた。

体を二つ折りに畳む形。

ぼちゅっ♡ぼちゅっ♡ぼちゅぼちゅぼちゅ♡

最奥が、もつと近くなる。

「ああああ♡♡しよこ、らめ、おく、もう、らめなお

♡♡」

「ことねちゃんの中、お兄ちゃんを覚え込ませてあげる♡」

ぼちゅぼちゅぼちゅぼちゅぼちゅぼちゅぼちゅ♡ぐちゅぐちゅぐ

ちゅ♡ねちゅねちゅねちゅ♡

「もっかい、行こうか♡」

「ま、まって、いま、いま、いったの……っ♡♡」

「だから、もっかい♡」

ぼちゅぼちゅぼちゅぼちゅぼちゅぼちゅ♡ねちゅねちゅね

ちゅ♡くりくりくり♡

（もう、なんも、わかんなくなる……、これ、これ、なん
で、こんな……っ♡♡）

「れ、れい、れいじ……っ♡もう、もう、らめ、らめなの
お……っ♡♡」

「お兄ちゃん、もっかい、イケ♡」

「ふあああ♡♡いぐ、いぐう、いぐう♡♡♡」

玲司も、最奥まで突き込む。

どくっ♡どくっ♡どくっ♡どくどくどく♡

熱が、奥に流れ込んだ。

(あ……、なか、で……、出てる……♡♡)

ことねは、トロリ♡と溶けた表情でカウンターに沈んでいた。

目の焦点は合わず、唇から細く息が漏れる。

玲司はネクタイを解いた。

ことねの手首には、薄く赤い跡が残っている。

玲司はその跡に、唇を寄せる。

ちゅっ♡ちゅっ♡ちゅっ♡ちゅっ♡ちゅう♡

「上手だったな♡」

ことねは応えない。

玲司はカウンターから降りる。ことねの体を抱え上げた。

脱力した手足が玲司の胸の前でぐったりと垂れる。

玲司はリビングを横切る。ことねの寝室まで運んだ。

ベッドの上に横たえる。

乱れたブラウスを直してやる気はないらしい。代わりに玲司は、ことねの太腿の内側に流れたままになっていた自分の痕跡を、自分の手で内側へ押し戻した。

ぬぷ……っ♡

「あ……っ♡」

ことねの唇が、半分目を閉じたまま動く。

「お利口さん♡ 零さないで、ちゃんと持っとけよ？」

玲司は寝具を引き上げる。ことねの肩までかけてやった。

眠っていく顔は、子供みたいに無防備だった。

玲司はベッドの脇に膝をつく。ことねの頬に、もう一度唇を落とした。

ちゅっ♡ちゅっ♡ちゅっ♡

玲司の薬指の指輪が、ことねの頬に触れた。

冷たい銀の感触。

ことねは、それを覚えていない。

玲司は寝室を出るとき、明かりを消した。

ドアを閉めながら振り返る。

ベッドの上のことねは、口元にうつすらと笑みを浮かべて眠っていた。

玲司は、それを見て低く笑った。

玲司の上着の内ポケットで、スマートフォンの画面がまだ薄く光っていた。さっきまで撮っていた動画の最後の一瞬が、画面の中で、止まらずに、ゆっくり再生されていた。

翌朝。ことねが目を覚ましたら、これは夢だったと言うだろう。

玲司は知っていた。

知っていて、あらかじめ、夢だったと言わせない仕掛けを、もう仕込んである。

体験版はここまで

続きは本編をお求めください